三島由紀夫における最遠の記憶

Early Infantile Memory of the Writer Yukio Mishima

齋　藤　　繁
Shigeru　Saitoh

要　旨

小説家三島由紀夫の幼少期の体験記憶を自伝的小説「仮面の告白」の冒頭の記事に着目し、出生時の産湯盥の記憶について、最近の周生期医学、周生期心理学の報告例を援用しながら、その真偽のほどを検討した。

もともと小説の記事は作者の心象風景そのものであって、現実における客観的事実とは直接的な関係はないと思われるから、ここで取り上げた産湯幻想が単なる想像の産物にすぎないものなのか、そうではなく、作者の実体験を交えたものであるかについて論証しようとした。

関連して人の生涯にわたる記憶、人生記憶の帰趨についてと最遠の記憶について論考し、最遠の記憶検索の方策についても論究した。

キイワード：

物理学的時間　心理学的時間　持続と継起の知覚と学習　時間の短縮と延長　記憶保持と想起　忘却と記憶検索　周生期心理学　胎児期記憶　出生時記憶　周生期記憶　人生記憶　エピソード記憶　ワーキングメモリー　ＳＴＭ　ＬＴＭ 記憶病理　記憶リハビリ　タイムトラベル

はじめに

人間の生涯にわたる記憶は、胎児期に始まり最高齢期に至るまで個々人の人生記憶として特徴づけられる。記憶内容は時間の経過とともに変容していく。多くの認知内容は忘却の彼方に押し遣られ、文字通り忘れ去られているが、忘れ得ずしてまるで昨日の事のように鮮明に記憶されている事柄があることも事実である。もちろん人生経験は個人によって質量ともに異なっているので、記憶の仕方や記憶内容についても千差万別であろう。

メモリストアに貯蔵された記憶には共有される事項も多いが、個人的自伝的に保持されている内潜的エピソードのようなものもある。他者にとって記号化されたアイテムは、それに裏打ちされている直接的な感覚や感情ないしは潜在的、無意識的意味を観取するまでに至らない。さまざまな年中行事、学校行事、スポーツなどの共通体験は共有され、公共性を帯びた記憶として印象づけられる。そこには感動と共通した感情体験がある。遠い過去の体験的なエピソードの記憶はある懐かしさを呼び起こす。喜びと悲しみの情動が裏打ちされているからである。

個人の日記やアルバム帳などは、過去における喜怒哀楽の体験の再現を容易にする。フラッシュバックし、鮮明によみがえるのである。ロングタームメモリは不可思議な魔力を備えている。忘れ果てていたことが不意に甦ることがある。いかに努力をしてみても、もはや生涯を通じて思い出すことができないような事柄のなんと多いことか。これは歴史学的ディスクールに似ているかもしれない。失われた伝説、失われた事実、事実の誤認、歪曲、隠蔽など後世において検証困難な史実が存在するであろう。人間の歴史研究における不連続性は、文献史料にウエイトをおく歴史研究においては回避しがたい問題となる。

それは個人史においても同様な問題が含まれていると思われる。それゆえ自伝的記憶の精度が問

われてくる。はたして長期記憶が正確で安定した状態を維持できているかどうかについてである。

記憶研究においては、記憶内容に含まれているであろう記憶の誤り、すなわち事実誤認・歪曲、記憶錯誤、記憶の欠落、記憶材料の合成、想起困難、忘却、さらには想像、空想・妄想、架空の事実、、記憶材料の時間・空間的錯誤など以外にも、伝聞、口伝・伝承、マスメディア情報などの影響とどのように向き合うかも課題となる。

本論はまず人の記憶の起源を尋ね、時間の経過とともに長きにわたって蓄積された記憶が如何に変容していくかを問題とするが、記憶内容については人生経験と記憶能力の発達とは決して無縁ではない。人生（生涯）記憶の問題は個人のライフヒストリィと密接に関係することは言うまでもない。

これまでの記憶研究は、主として神経学、神経生理学、神経心理学、記憶心理学などの脳科学においてさまざまな研究がなされてきたが、特に記憶の始源についての実証的研究は緒についたばかりの段階にあり、さらに超高齢期の記憶問題となると、加齢にともなう著しい知能低下と認知障害などとも無関係ではなく、神経心理学や記憶心理学においても、いまだ未開拓な分野に属していると思われる。

本稿の主要な検討課題は、周生期記憶と高齢期における記憶の主観的時間体験とのかかわりについてである。現在の記憶能力を維持し、失われた記憶をいかにして取り戻せるかについても検討を進めたい。

１．三島由紀夫の周生期記憶をめぐって

「どう説き聞かされても、また、どう笑い去られても、私には自分が生まれた光景を見たという体験が信じられるばかりだった。おそらくその場に居合わせた人が私に話して聞かせた記憶からか、私の勝手な空想からか、どちらかだった。が、私には一箇所だけありありと自分の目で見たとしか思われないところがあった。産湯を使われた盥のふちのところである。下ろしたての爽やかな木肌の盥で、内がわから見ていると、ふちのところにほんのりと光がさしていた。そのところだけ木肌がまばゆく、黄金でできているようにみえた。ゆらゆらとそこまで水の舌先が舐めるかとみえてとどかなかった。しかしそのふちの下のところの水は、反射のためか、それともそこへも光がさし入っていたのか、なごやかに照り映えて、小さな光る波同士がたえず鉢合わせをしているようにみえた。」（ 仮面の告白 第1章５頁 ）

これは作家三島由紀夫の小説「仮面の告白」（昭和24年）の冒頭の部分「永いあいだ、私は自分が生まれたときの光景を見たことがあると言い張っていた。……」につづく一節である。[14] 三島由紀夫は大正14年1月14日の晩、四谷永住町の自宅で出生した。心理学的には数少ない周生期記憶の一例ということになるが、これが文学作品である以上、真実として額面通り受け取る訳にはいかない。単なる空想に過ぎないかもしれない。はたまた文学的創作であるかもしれない。しかしかれは単なる空想でも伝聞でもないと最初に断っているのである。産湯をつかった盥（たらい）のふちのところの印象はこれだけは間違いなく真実であると訴えているのである。

出産という生々しい生物学的事象を、新しい生命の誕生、私のこの世への誕生を美しく飾るためのフィクションであったかもしれない。作家は創作において、往々にして虚実まぜこぜにして騙（かた）ることがあるからだ。

三島は「電燈のイデア」の中で、「私には、ただの電燈の光が、こうまで真昼の燦然たる太陽の光と同じ効果を与えるのにおどろき、その光を正に熱帯の太陽の光りと感じることによって、宮殿が急に巨大なものになり、太陽の寸法にふさわしいほどの壮大なリアリティを持つにいたるのを発見した。」と言い、子供のころから現実を眺め変える術を学んでいた、と述べる。[14] 太陽の普遍性を読者に感じさせ、光源の普遍性をわが手に握ることが三島文学の出発点であった。それゆえこの電燈のイデアが産湯盥の幻想の背景にあったことは間違いないと言えるだろう。

三島の尊父平岡梓（あずさ）はこの小説の読後感を次のように述べている。[3]「僕は伜の作品『假面の告白』を読んで、その思い切ったハッタリ振りにびっくり仰天しました。……この他にもおよそ事実に反すること、ないことがたくさんシャーシャーと並べ立

ててあります。僕は小説というものはフィクションもフィクション、こんな出鱈目を書いていいものかしらと考えました。すると世の中は面白いもので、これを読んだある訪問客が真顔で、『公威（きみたけ）さんは超天才だから心眼で見たのだ、あれはウソではない、まるで神様だ』とまくしたてるので、僕は呆れてしばらくものが言えませんでした。空想を空想として面白く読む人、文学的に深刻に読む人、これは事実に相違なしと読む人、いろいろの人がいるものです。とまれ、こんなつまらない産湯をつかわせる話なんか家内が話し出したらお断りになるのが賢明です。」（伜・三島由紀夫 42-43頁　1972）。父親の批評は辛辣であるが、大正と昭和初期というわが国日本の時代的背景を如実に物語っていると思われて興味深い。

筆者はかつて孫娘が３歳の誕生日を迎える頃に、偶然に出生時の体験記憶について尋ねたことがある。まず産室の明るさ、そこにいた人々、その性別、年齢、服装などについてであったが、その答えは「明るい部屋（分娩室も新生児室も蛍光灯で明るく照明されていた。）、白い服を着たおじさんのような人と女の人（たぶん助産のため立ち会った共に夫婦の産科医、それに看護師）が見えたの。」「生まれるときは頑張ったよ。」とも付け加えた。

新生児の娩出の瞬間の知覚がどのようなものかは定かではないとしても、おそらく視覚の眩しさとぼんやりした全体像の認知ぐらいしか無いのではないかという疑問が浮かぶ。羊水内では眼球運動、手指運動、口腔運動などがされてきているので、出生直後でもある程度の視覚反応は可能であったのではないかとも推定される。孫娘の陳述は筆者の現場検証と母親の話とも合致していたのである。

ハーバード大学のＴ．バーニー（1981年）は胎児は感じ、考え、記憶するのだとし、特に出生時の記憶については誰でもが持っていると主張する。Ｄ．Ｂ．チークの研究は自分がカリフォルニア州の産科医として立ち会った４人の若い男女を催眠誘導して、その一人ひとりに生まれてくる時の頭や肩の位置がどのような状態であったかを思い出してもらったのである。この４人の分娩記録は20年以上もフアイル・ケースに鍵をかけられて厳重に保管されていた。そして一人ひとりが語った内容は、頭がどのように回転し、肩がどの位置にあり、また、どのように生まれ出たかについてまで、正確に描写されていた。これらの陳述はいずれも後で照合された各自の分娩記録と見事に一致していたのである。[28)]

このように出生時記憶の検証は薬物、Ｓ．フロイトの自由連想法、催眠誘導によって可能である。すでに1940年代から1950年代には母親の分娩室入室時、出産時における情動が胎児や乳児の発育に影響を及ぼすことが明らかにされていた。

出生前の聴覚的インプリンティング（刷り込み又は刻印づけ）については、1973年ノーベル生理学・医学賞を受賞したＫ．ローレンツらの研究がある。[8)] 日本医科大学の室岡一（1975年）は、子宮で収録した体内音（子宮近傍を流れる規則的な血流音、肺の呼吸音、心音など）を出生後聞かせることにより新生児の泣きが即座に収まることを明らかにし、そのレコードを市販するまでに至っている。[13)]

それ以前からもいわゆる胎教音楽のブームは起きていたのである。赤ちゃんはモーツァルトが好き、ヴートーベン、チャイコフスキー、ショパンらのクラシック音楽が胎教に良いとされていた。室岡はママのおなかの子守歌として、聖母の宝石、トロイメライ、Ｇ線上のアリア、アンダンテカンタービレ、眠りの森の美女、白鳥、タイスの瞑想曲などを推奨している。

聴覚反応は聴器が形成し稼働し始める妊娠５ヵ月あたりから可能であるといわれている。しかし子宮内の胎児は羊水の中にあり、聴力のレベルやその聴空間は通常の環境における場合とは異なるであろうし、音響の聴取の内容は通常よりは不鮮明で、かなり低レベルにマスキングされているのではないかとする見解もある。

七田眞ら（1998年）はバーストラウマについて総括し紹介している。[25)] フロイトは人生最初のトラウマは狭い産道を通る苦痛であろうとしたが、それ以前にすでに母親の栄養状態、喫煙、飲酒、服薬、心理状態によって深刻な影響を受けてしまうことがこれまで立証されてきた。とくに胎児期の母子間におけるエントレインメントは、やがて乳児期の愛着形成に深くかかわっているし、ゼロ歳

時の母子関係がその後の成長発達に重大な影響を及ぼすことは言うまでもない。

ここで改めて三島由紀夫の産湯盥の一節を検討してみよう。かれの主張は周囲のだれもが信じなかったし、かえって頭がおかしいとまで揶揄される始末で、誰もとりあってくれなかったのである。かれの人生における最遠の記憶が出生時までにさかのぼって想起されたことは、かれの病弱な生い立ちとは別に、かれの記憶装置が人並み外れたものであったことの証しであると言えるかもしれない。

幼少期の記憶想起はほぼ２歳くらいからというのが通説であるが、個人差があるので一概には言えないと思う。何らかの心理外傷体験（PTSD）があるとすれば別問題である。エピソード記憶は、それにエラボレーション作用も加わって長期記憶として痕跡化され、回想されやすいというから、近親・家族との出来事、年中行事とか保育園や学校などのイベントは保存されやすいだろう。なんといっても人との出会い、身近な人々との交流などは、強いインパクトをもってながく記銘・保持されるにちがいない。

２．作品「金閣寺」と「仮面の告白」のイメージ

改めて、「仮面の告白」の出生時記憶の真偽について再考してみよう。あの産湯に浸かった時の盥の木肌の印象と光の反射の追想の記述が、まぎれもなく回想として三島自身の遠い過去記憶の中からよみがえってきたものなのか、それとも他日ほかの機会にたまたま偶然目撃したシーンを自分の出生時の体験にに重ね合わせて、自分のときもきっとこうだったんだろうと仮想したデスクールに過ぎないものであったかもしれないということである。

三島由紀夫の他作品に類似のイメージ表現があるだろうか。イメージャリィ・タイプには触覚運動型、視覚型、聴覚型、視聴覚型といろいろあるが、かれの表象型は視覚表象が優位なタイプであると思われる。ロングターム・メモリィは、通常サイレントな視覚的心象風景として想起されることが多いと考えられるが、しばらくすると動画のように想起されるかもしれない。つまり静態的な写真かビデオの視覚的映像としてである。三島の「金閣寺」の断章を以下に挙げてみる。[16)]

「遠い田の面がきらめいているのを見たりすれば、それを見えざる金閣の投影だと思った。……」（金閣寺 第1章 310頁）

「私はまた、その屋根の頂に、長い歳月を風雨にさらされてきた金銅の鳳凰を思った。この神秘的な金いろの鳥は、時もつくらず、羽ばたきもせず、自分が鳥であることを忘れてしまっているにちがいなかった。しかしそれがとばないようにみるのはまちがいだ。ほかの鳥が空間を飛ぶのに、この鳳凰はかがやく翼をあげて、永遠に、時間のなかを飛んでいるのだ。時間がその翼を打つ。翼を打って、後方に流れてゆく。飛んでいるためには、鳳凰はただ不動の姿で、眼を怒らせ、翼を高くかかげ、尾羽をひるがえし、いかめしい金いろの双の脚を、しっかと踏んばっていればよかったのだ。

そうして考えると、私には金閣そのものも、時間の海をわたってきた美しい船のように思われた。」（金閣寺　第１章　320頁）

「―私は激甚の疲労に襲われた。

幻の金閣は闇の金閣の上にまだありありと見えていた。それは燦きを納めなかった。水際の法水院の勾欄はいかにも謙虚に退き、その軒には天竺様の挿肘木に支えられた潮音洞の勾欄が、池にむかって夢みがちにその胸にさし出していた。庇は池の反映に明るみ、水のゆらめきはそこに定めなく映って動いた。夕日に映え、月に照らされるときの金閣を、何かふしぎに流動するもの、羽ばたくものに見せていたのは、この水の光であった。たゆたう水の反映によって堅固な形態の縛を解かれ、かかるときの金閣寺は、永久に揺れうごいている風や水や焔のような材料で築かれたものかと見えた。」（金閣寺　第９章　455頁）

三島の出生は夜であったから、陽の光でないことは確かであろう。「ふちのところにほんのりと光がさしていた。そこのところだけが木肌がまばゆく、黄金できているようにみえた。」と語る。ここで光というのは人工照明のことであろう。三島

はさらに抗弁する。

「－この記憶にとって、いちばん有力だと思われた反駁は、私が生まれたのが昼間ではないということだった。午後９時に私は生まれたのであった。射してくる日光のあろう筈はなかった。では電燈の光だったのか、そうからかわれても、私はいかに夜中だろうとその盥の一箇所にだけは日光が射していなかったでもあるまいと考える背理のうちへ、さしたる難儀もなく歩み入ることができた。そして盥のゆらめく光の縁は、何度となく、たしかに私の見た私自身の産湯の時のものとして、記憶のなかに揺曳した。」（仮面の告白　第１章６頁）

著者は三島由紀夫の誕生の秘密を暴き、それに科学的証明を与えようなどとは毫も考えていない。数多い作品群のなかから、「仮面の告白」でのイメージングが「金閣寺」に至ってよりいっそうに開花し、展開していったように思われる。

かれにとって金閣寺はまさしく静止画像なのではない。はたまた屋根の頂の鳳凰もまた時空を永遠に移動するタイムトラベラーなのであった。田んぼの面の水のきらめきを見ただけで、はるか彼方にある金閣寺を連想し、金閣そのものが時間の海を渡ってきた美しい船であるというイメージ表現は、いかにも凡庸ではない書き手をおもわせる。

三島の「金閣寺」には水と火のエレメントがふんだんに交叉してあらわれる。わが国の伝統的建築である五重塔の屋根の先端には必ず水煙が取り付けられている。水煙と呼ぶが本態は火であるから火炎の形態を模している。物の本によるとお釈迦様を荼毘に付した火を象徴しているらしく、表向き火焔では建物には縁起でもないので、建前上水煙と呼ぶことにしたらしい。日本人的本音と建前の見事な使い分けである。大部分の人は、おそらくそんなことに対しては無頓着で、たいして関心がないもののようである。それにしても五重塔の天辺に火焔の飾りじゃ収まりが悪いから、やはり真実ではないが、水煙の方が座りが良いであろう。

日本古来の伝統的建築には、日本人の知恵と工夫、精神的伝統の真髄が表現されている。古い言葉で言えば大和ことば、大和心、大和魂であろう。

小説金閣寺では、終末において寺僧が国宝金閣寺に放火して焼失させてしまうという反逆的、背信的な結末の設定があるが、実際にあった事件を題材にしたとはいえ、単なるドキュメンタリィタッチの物語展開で終わらなかったという点で、また一人称による物語の自在な展開においても、表現者としての非凡な推理能力と優れた才覚が認められるのである。

「仮面の告白」冒頭のイメージの真偽は、文学的表現の問題としてしばらくは問わないことにしよう。水に対する得も言われぬロマンチクな幻想は、ひとり湯ぶねで遊んだときやプールや海で波頭を切って泳いだ時の水の揺らぎを想起してみれば、誰しもが容易に共感をもって同一化することができる筈のものであろう。読者は例外なく作中人物の私に同一視する。そうして産湯というもはや誰しもが想起できないような人生最初の誕生シーンを再現してみせることで、うん、これは本当だと思わせてしまう。いわば小説の冒頭のつかみの卓抜さをみた思いがするのである。

小説家にとっては真実を語ることよりも真実だと思わせることのほうが大事である。虚構の物語に読者の共感と同一化が起きればそれでよいのである。金閣寺を読むわれわれ読者は、いつの間にか作中の主人公である私を同一視し、すっかり私になりすましていることに気づく。読了し、あわてて我に帰るという始末なのである。

産湯盥の体験的幻想は単なる空想の範囲を超えているのかもしれない。たゆとう水のゆらぎ、盥のふちのところにほんのりと光がさす、黄金色の木肌などの表現に、我々はなにかしら現実認識を超えたものを感じとることができる。

こうした表現は三島の美意識から出たものであることは首肯できる。あれは単なる騙りでしかないとか、ウソだとするのは簡単である。妄想か狂気の所為とするのも同然。産湯をつかうなんてありふれている、どこでもあることだ、文学の素材にするなどつまらないなど、それは世俗というものである。

真実、三島は出生時の記憶を想起できた人であったかも知れないではないか。かれは歴史家の

ように忠実にそのことを小説に書いたのだとしたら、真実はいまだ藪の中なのである。

「あなたは出生時のことを記憶していますか」という問いは、いずれ周生期医学、周生期心理学の手によって科学的に解明される問題である。すでにわれわれの科学的実証的研究課題として視野に入っているからである。しかし三島がイメージした時空を自由に移動する表象に基づくタイムトラベルということになると、スティーヴン・ホーキングのビックバン宇宙論とのかかわりが出てくるので、文学的にも興味ある題材になることは請け合いである。三島由紀夫は1968年（昭和43年）43歳の若さでこの世を去ったが、０歳から43年間記憶を保持し、いずれも若々しく鮮明な記憶世界で過ごすことができた。

かれの充実した時間はますます膨張し、自身は、時を忘れて執筆活動に専念したことであろう。ついには壮絶な最期を遂げたのではあるが、人生の最初には燦然とした陽光につつまれて誕生した。そこには安らぎと祝福とがあった。

われわれ人間は長い一生の間に膨大な記憶情報を脳組織に仕舞い込んでいる。失われるものも多いであろうが、個人にとって有意味でより重要なものは、容易に想起可能なレベルにおかれているに相違ない。さて高齢者にとっての最遠の記憶とはどんなものであろうか。以下に若干の考察を試みることにしたいと思う。

３．人生記憶と記憶リハビリ

年をとるとにつれて時間が早く過ぎるように感じられるという。地球上においては、物理学的客観時間は常にほぼ一定であり、正確に時を刻んでいるのだが、心理学的主観時間には絶えずゆらぎがある。年齢・性別によって、場所や社会的状況に応じて心理時間の経過が異なってくる。つまり子どもにとって修学旅行の１週間は、後になってみると３週間にも感じられるだろうが、風邪で休んだ３日間は当座は長く感じられるにしても、後になればほとんど記憶に残らないかもしれない。

主観的な意識時間について、梶塚仲晃は次のように指摘している。「少年の１年が心理的には50歳の１年より５倍長く感ぜられる、というジャネーの法則は、脳の神経回路の可塑性の大小と関係しているようにみえる。すなわち、少年期には成人より可塑性が著しく大きく、多くの出来事が記憶に残り易いのに反して、老人では可塑性が低く、出来事を多く経験しても、すぐ消え去って脳に痕跡となって残ることは少ない。いい換えれば、老人では記憶による時間軸が著しく短縮しているのではあるまいか。」（26、161-166頁）。

こうした脳の可塑性の低下は、すでに10代の終わり頃から始まっていて、50代でますます顕著になってくるのである。主観的心理時間は場合によっては延長もし短縮もする。たとえば待つ時間は長い。しかし無味乾燥な長広舌やお説教話も長いし、早く終わってほしいと願う。逢引する恋人たちの逢瀬はまたたく間に過ぎる。しかし、単調な時間の経過後の記憶は何も残らない、無かったも同然で、失われた持続つまり時間ということになる。逢瀬は充実した時間であり永く記憶に残る。

時間心理学的には持続の評価が問題である。空虚な時間は長く、退屈するが、過ぎてしまうと何も無かったも同然、ほとんど記憶に残らない。主観的には時間は失われてしまう。このスタンスをどんどん広げていくとどんなことになるだろうか。艱難辛苦のうちの苦節10年の歳月は生涯のうちで、おそらくいちばん長い歳月ということになるだろう。そのお蔭で今日があるとも。順風漫歩、幸運に恵まれた10年の歳月もまたそうであるかもしれない。一生のうちで忘れられない日々であるからだ。きっとさまざまな思い出に満たされていることだろう。生涯のさまざまな記憶は時系列に沿って配列されている筈のものである。

ある種の記憶は厳密に脳の決まった場所に蓄えられ、そのほかの記憶はすぐ近くに分散される。意味記憶とエピソード記憶は陳述的記憶（実生活の記憶）に分類されるが、側頭葉が関与していると考えられている。短期記憶（STM）であるワーキングメモリー（作動記憶）は、その一つは音韻ループ（文字、数字、単語などの）で、これでセンテンスの組み立て作業などをする。つぎにあげられるのは視空間的記銘メモである。これは視覚的、空間的イメージを受け取ってコード化する。

三つめのものは推論や暗算を助ける働きをする

が、コンピュータのRAM（読みだし、書き込み記憶素子）にたとえられる。

ここで短期記憶（STM）情報がいかにして長期記憶（LTM）へと転送されるのかということが問題になる。記憶装置レジスターの作用によって緩衝回路（buffer）を通り抜けた情報アイテムが長期記憶として長く保持される。[27]

長期記憶には非陳述的記憶（運動・動作、古典的条件付け）が温存される。掃除、洗濯などの日常的身辺生活動作、階段の昇降、車の運転など、長期間の習慣的動作は容易に失われることはない。

人は成熟するにつれて若返る、とすれば、精神的向上と質的深まりを意味している。老いに向かえば、気ままこそ美徳とするのがH．ヘッセの主張である。[4] 精神的充実のためには過ぎ去った日々をできるだけ想い出すことからも可能である。新しい人生目標の発見にもつながれば、年齢に関係なく精神的成熟は精神の若返りをもたらすと考えられる。

認知症になると記憶能力の衰退が著しい。また陳述的記憶も損なわれる。つまり思考と記憶の能力低下がある。しかし環境認知は部分的になされ、日常生活動作（ＡＤＬ）はある程度保たれる時期が認められる。大切なのは外見的な行為障害よりも、当人の意識内容と意識レベルの理解である。

認知障害に伴う外観的な行動障害のみに着目していると当人の意識内容の如何が無視されてしまう。特に情動の動きを察知して適切妥当に対応していかないと、不安と恐怖を増幅、自発的生活行動を制止・阻害してしまい、かえって他への依存性を高めてしまうという悪循環を招来することにもなりかねない。

認知症者に限らず高齢者一般に共通的な問題はもの忘れ、直接記憶能力の低下、陳述的記憶能力の低下である。東北大学の川島隆太は、このあたりに着目して訓練シートを開発している。まさしく脳機能のリハビリテーションを目指したものである。

脳機能の劣化を防ぐためには記号操作、書写、計算ドリルの脳トレで済むわけではない。より能動的にアプローチするためには、記憶機能の向上を目指さなければならない。

そのためには運動・動作記憶、視聴覚的記憶を高めながら、課題動作の再生、絵画、パズルなどの再生を求めるような脳トレが必要である。筆者はこれを記憶リハビリテーション（記憶リハビリ）と呼称することを提案したい。

記憶リハビリには、一つめは海馬機能の向上を図るための生理心理学的処方がある。二つめは、幼少期からの回想法による想起訓練、LTMの検索機能の向上である。三つめは交流分析や認知行動療法の処方である。栄養や薬物といった身体機能、特に脳機能の向上も配慮されなければならない。適度な食事と運動を基本としてサカーディアンリズムを確保し、個人にとって有意味・大切な記憶アイテムの発見が記憶リハビリの要訣である。

さらに記憶アイテムの想起・再生の繰り返しが、長期記憶(LTM）を維持する上で重要である。その都度記憶内容を点検し、正す作業が必要である。例えてもう古くなった蒸気機関車・ＳＬの点検と同じようなものであろう。意識的、無意識的に再学習された記憶アイテムは、いつもフレッシュで鮮明である。

日常的に、テレビの懐かしのメロディとかビデオ、ＣＤ、ＶＨＳ、ＤＶＤの映像などの果たす役割は大きい。また仮に三島由紀夫の「潮騒」の世界、川端康成の「雪国」、「伊豆の踊子」、太宰治の「パンドラの匣」、「女学生」、谷崎潤一郎の「細雪」など以前に愛読したことのある小説を再読し、あわせてビデオ、ＤＶＤなどの映像を楽しみながら、自らの若き日々を回想してみることは、老いの日々にとってよりよく効果的であると思われる。

記憶心理学的には「不使用の原則」と称するようなものがあり、当面必要としないアイテム記憶システムは休止し忘却してしまうと考えられる。しかし完全に忘れてしまったのではなく、記憶ストアの底には存在しいるはずなので、これを呼び起こす手だてを考えなければならない。人名や事物の固有名詞の忘却がある場合、つまり憶えているはずだが浮かび上がってこないといった事例についてである。

単一名詞の失念は、「もの葉づけ」という技法を活用する。これは形容詞、具体名詞、短文何

でも差し支えない。よくある人名や固有名詞の失念はフルネームで記憶していないとか稀現語や不使用語の場合に起きやすい。例えば姓は知っているが、名が不明な時、場所か本人の特徴をとらえて、「リンゴ園の夏木秋子さん」とか「岩木山麓リンゴ園の夏山秋子さん」の様に、フルネームで覚えなおすことである。しかし折角表層意識に甦ってもまた直ぐ忘れる可能性があるので、これを維持するためのリハーサルを試みなければならない。上の様に単に名前だけでなく関連する事項を絡めて再記名するのはは精緻化リハーサルと呼ぶ。これを３ないし５回ほど音唱するか筆記などすると、もう金輪際忘れっこない。これすなわち記憶のリフォームである。さらにあるエピソードが加わればより確かなものとなる。所謂物語記憶である。映像をみながら話し合いをすることは記憶のリフレッシュに役立つと言える。

三島由紀夫の様に、まだ若々しく、記憶装置のメカが優れている人には、このような無理強いは不要であろうが、ふつう一般においては、加齢に伴う多忙、情報量の増加と多様化、それに記憶アイテムの再生・再認努力の低下が、物忘れを助長している面があると考えられる。

記憶力の低下は30歳あたりからの一般的な知能の低下の最大要因として挙げられる。記憶力を維持し、新しい情報の獲得・学習が、若さを保ち、加齢に伴う老化を防ぐ最良の方法であると考えられる。知能の発達は17・8歳あたりがピークなのである。経験的要素を加えてみても22・3歳位までであろうとするが、今日までの心理学的見解である。

視聴覚的、動作的、陳述的記憶法として､名前を呼称しながら書き込む。一つのエピソード（逸話）に組み込んで読むか、物語化することである。

メモリスパン（記憶範囲）をふたたび確保できれば記憶能力は回復してくる。迂遠にみえるがこの方法によると記憶は確かなものとなり、再びLTM に転送されやすくなる。もはや金輪際もの忘れはしなくなる。「急がば周れ」これが鉄則である。

若者には「最短路（近道）の法則」か「労力最少限の法則」が当てはまるが、高齢者は努めて回り道を取るべきで、労を惜しむとかえってゴールは遠くなること必定であろう。エイジングにおいては、自立志向と労を惜しまないことが長生の秘訣であることを、常々念頭に入れておきたい。

すでに廃用となっている知識、技術をよみがえらせ、実際に活用してみることである。おばあちゃんの知恵は、裁縫・料理、手芸などレパトリィが多様であるが、男性は定年になると仕事場も仕事仲間をも失い、エンジン停止状態に追い込まれてしまう、社会的役割の交代が起こる。今や愛妻と攻守ところを変え、留守居役として家にいることが多くなり、外での活動が不活発になる。

そこで夫はこれまでの得意分野を生かし、スポーツ、介護、俳句、短歌、工作、園芸・栽培、飼育などのフィールドワーク、海外旅行、温泉・観光地巡り、四国八十八箇所巡りなど、探せばいろいろ出てくると思う。ＳＬの運転、ＮＰＯなどの社会参加が記憶機能を低下させることがない。

その昔人口に膾炙した事柄は、お散歩、盆栽づくり、お茶のみ友達、孫の世話、養生訓の実践であるが、これらはいずれも故なしとはしない。

すすんだ現代の養生訓は与えられたものではなく、他力本願を止めて、自らデザインする方が適切妥当であろう。天は自ら助くる者を助く、である。

結　び

生涯にわたる記憶について人生初期の原初的記憶の１例として、小説「仮面の告白」冒頭の記述をとりあげ、これが単なるフィクションに過ぎないものなのかという設問から、本論の論考がすすめられた。最近の胎生心理学、周生期心理学の成果をふまえて、作家三島由紀夫の「仮面の告白」冒頭の部分にある産湯盥の幻想について考察を試みたのであるが、客観的事実の記述であると確信するまでには至らなかった。

加齢にともない記憶力が衰えていくことは避けがたい。生涯において貯蔵された記憶をよみがえらせる方策についても論考を試みた。おそらく幼少期の体験記憶は生涯持ち続けられることであろう。晩年における最遠の回想は、ある懐かしさの感情をともなってなされる。原初的イメージは楽

曲のモチーフのように人の生涯を貫くであろう。

おわりに、三島由紀夫の作品を通じて、かれの生涯のイメージングについて若干触れてみたい。三島由紀夫は学習院初等科に在籍した８歳のころから、すでに清明な陽光と水面のたゆとう揺らぎについての華やかな幻想を抱き始めていたことが、かれの手記から明らかである。

彼は大正14年１月14日午後９時少し前に、東京四谷区永住町２番地において、父平岡梓（あずさ）と母倭文重（しずえ）の間で誕生したのだが、産湯をつかわされた時の明るい陽の光と盥に映える黄金の木肌と水のゆらめきの印象が、あざやかな筆致をもって表現されている。この作品によって文壇における地位はほぼ確立されたと言われている。こうした光と水の自在なイメージングは、後の「金閣寺」においてよりいっそう華麗に開花していったのである。

彼が築いた精神的城塞は国粋主義的な大和魂の唱道、日本古来の武士道の礼賛であった。強靭な肉体への憧憬、そして盾の会の創設、自衛隊への体験入隊、まさに行動するロマンチストの面目躍如としていた。彼の精神的城塞は伝統的な日本精神の墨守、鼓吹であり、それは確固として守り抜かれたように思われる。たとえ憂国の志士として殉教のための自決という悲劇的な終末を迎えたにしてもである。当時の佐藤栄作首相は文士が腹切りをしたと聞いて、「全く気が狂っているとしか思えない。常軌を逸した行動だ。何が原因なのかよくわからない。」とマスコミに語ったと言う。（読売新聞、1960. 11. 26）。

かれは一途に自己主張を貫き、かれの信念に殉じた。あくなき精神の透明性と純粋性の探究は、座右の銘「清明」に正しく象徴されているであろう。

現代日本文学に輝かしい光芒を放ち、浪漫主義文学の旗手として、エッセイスト、詩人、劇作家としても多彩な才能を示した文壇の寵児は、狂気の嵐の中で終焉を迎えたのであろうか。石原慎太郎は、「現代の狂気としかいいようがない。……ただ若い命をかけた行動としては、あまりにも、実りないことだった。」（ 読売新聞1960. 11. 26）と述べたが、たとえそうではあっても、かれを取り巻く、なにほどか不安な様相を示す騒然とした世相、不穏な社会がそうさせたとすることもできるであろう。

激動の昭和を生きた三島由紀夫の生涯の軌跡をを辿ってみるならば、ひたすら昭和という時代精神の残照かシャドウピクチャーをみる思いがする。果たしてかれの魂は豊饒の海へと転生したのであろうか。彼の言う豊饒の海とは荒涼たる月世界の水無き海のことである。心は清明にして月天にあり。ふと、振り向けば、そこに燦然たる一条の陽光が射していることに気づかれる筈である。そこにあるものは戦場で散華したあまたのおとこたちの、あるいは恋人を奪われた女たちの、そしてまた原爆で無残に生命を奪われた人たちの悲痛な魂の叫びの残映なのであろうか。

参考文献

⑴　千葉胤成　最遠の回想　千葉胤成著　作集２　無意識の心理学　1972年

⑵　Draaisma D. Why Life Speeds Up As You Get Older.How Memory Shapes Our Past.Cambridge University Press, 2004.（鈴木　晶訳 なぜ年をとると時間の経つのが速くなるのか―記憶と時間の心理学　講談社　2009年）

⑶　平岡　梓　伴・三島由紀夫　文芸春秋　1972年

⑷　Hesse H. Eigensinn macht Spass:Individua- tion und Anpassung Zusammengestellt von Volker Michers. Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main,1985.（岡田朝雄訳 わがままこそ最高の美徳　草思社　2009年）

⑸　福島次郎 三島由紀夫―剣と寒紅　文藝春秋　1988年

⑹　梶谷　哲男　三島由紀夫―芸術と病理 金剛出版　1971年

⑺　小泉浩一郎　「仮面の告白」論―始源のエネルギーをめぐり　国文学　第38巻５号　68-73頁　學燈社　1993年

⑻　Lorenz K. THE KING SOLOMON"S RING. 1949.（日高敏隆訳　ソロモン の指環　106頁　早川書房1981年）

⑼　松本　徹編　三島由紀夫　河出書房新社　1990年

⑽　松本　徹　三島由紀夫の作品を読む　国文学　第26巻9号　學燈社　1981年

⑾　松村　剛　三島由紀夫―その生と死　文芸春秋　1971年

⑿　村松英子　三島由紀夫　追想のうた　阪急コミュニケーションズ　2007年

⒀　室岡　一　ママのおなかの子守歌　ＬＰ　TW-80001　東芝ＥＭＩ1975年

⒁　三島由紀夫　仮面の告白　三島由紀夫集　新潮日本文学45　5-112頁　新潮社　1968年

⒂　三島由紀夫　源泉の感情　三島由紀夫　対談集　河出書房新社　1970年

⒃　三島由紀夫　金閣寺　三島由紀夫集　新潮日本文学45　310-458頁　1968年

⒄　三島由紀夫　生きる意味を問う　大和出版　1984年

⒅　三好行雄編　三島由紀夫必携　別冊国文学　No.19　1983年

⑲ 西　昌樹　サイコセラピーー空間を旋りて　国文学　第38巻 5号　1993年
⑳ 太田信夫、多鹿秀雄編　記憶研究の最前線　北大路書房　2000年
㉑ 齋藤　繁　高齢者の記憶障害と介入方策についての一考察　弘前学院大学社会福祉教育研究所紀要　第1号　56-65頁 2004年
㉒ 齋藤　繁　重度記憶障害を伴う高齢者の介護支援方策について　弘前学院大学社会福祉学部研究紀要　第5号　1-13 頁　2005 年
㉓ Sanger,S.　You and Your Baby's First Year.　Barbara Lowenstein Literary Agent, NewYork,1985.（竹内均訳　乳児はなんでも知っている　祥伝社　1987年）
㉔ 茂原輝史編 没後20年三島由紀夫を読むための研究辞典　国文学　第35巻 4号　學燈社　1990年
㉕ 七田眞、つなぶちようじ　胎内記憶　ダイヤモンド社　1998年
㉖ 塚原伸晃　時間の認識と記憶　脳の可塑性と記憶　161-167頁　紀伊国屋書店　1986年
㉗ 山鳥　重　記憶の神経心理学　医学書院　2002年
㉘ Verny T. & Kelly J.　THE SECRET LIFE OF THE UNBORN CHILD.　C/o Barbara Lowenstein Literary Agent.　New York,1981.（小林登訳　胎児は見ている　祥伝社　1987年）